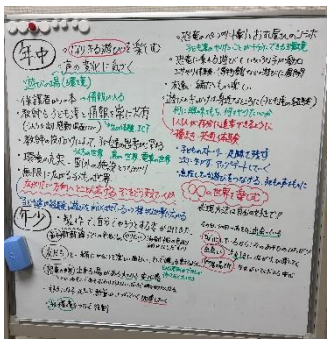
2025.8.4 好きが加速する

先週、職員で定例の月曜カンファレンスをしました。
今回は県内幼稚園の先生、そして教職大学院から観先生が参加してくださいました。
この日は、先日の三校園夏季実践研究会で各先生が発表した事例を共有する時間でした。
お互いにどのような内容で子供たちの姿を追っているかは、日々の様子や語り合いからなんとなく知ってはいます。しかし、子供たちの文脈や姿を事例として書いてみたことで、どのような気付きがあったのか、またどのような点を悩んだのか。そして、義務の先生からはどのような感想があったのか。それらをコンパクトにまとめながら、それぞれが報告をしあいました。

まずは、率直にこの時間がとても面白かったです！
それはなぜかと考えていると、子供たちの姿を思い出しながら、ともに伴走する報告者。その報告を聞きながら、周囲の教員は自分の文脈でさらに報告者を伴走していく。
「わかる、わかる！」「私もそうするなー！」「それはどうするとよかったんだろう？」「難しいよねー」
日ごろ、いろいろ保育の悩みなども園内リーダーを中心に共有してきました。「どうやったらもっと遊びが広がるのか」「協働性が足りていないような」「こちらの仕掛けや手立てをもっと考えないと」と悩みだすと止まりません。今までの自分の保育観やフレームに目の前の子供たちを当てはめようとしてしまうとなおさら迷走していきます。しかし、事例を聞いてみると「そこまで遊びは広がってたんだね！〇〇くん、とても力を発揮しているし、素敵な姿だよ！」と周囲から声があがります。「『自分のやってみたい』が存分に保障されている空間がやっぱり大切で、それが空気感となってあるから、年少さんも自由に年長保育室に入ってきてどんどん遊ぶ姿につながるんだね！」共に事例を編みなおしながら、子供の姿に価値づけをし、また教師の関わりについてもよかった点も課題点も含めてお互いに認め合える。だからこそ何かこのカンファレンスも安心空間であり、面白いと感じたのかもしれません。子供たちと一緒で、教員間のカンファレンスでもこの空気感を大切にしたいのです。

遊びが単発で終わりやすいと感じていた年少さん。しかし、一人でじっくりと遊びを楽しみ、単発でもそれをいろいろな遊びをまたぎながら積み重ねていく中で、自分なりの「好き」と出会い、少しずつ人と関わり合いながら遊ぶことに興味をもち始める子がでてきたとのこと。人との関わりが増えていくと、「好き」なものに対する思いがぐっと強くなり、さらに遊びは広がり、またこだわりも生まれてきた年少さんの姿が紹介されました。その姿を年少の先生は「好きが加速する」と表現していました。

その子なりのタイミングもあると思います。その「好きが加速する」瞬間を我々教員も見逃さず、どう支えることができるのか。きっとそれも遊びの展開の可能性を探るためにも必要なことではないかと考えました。
この時期に、4～7 月までの保育を事例を通して省察する。子供たちの姿から自分たちの保育を捉えなおし、また次への展望を見据えていく。そのような時間になったのではないでしょうか。